

アダムとイブの子孫たち〜黒沢峠〜

黒沢峠は、米沢藩が築いた見事な石畳の道だ。しかし、馬に乗って進んでいくバードにとっては、あまりゆかいな旅ではなかった。馬が暴れだし、自分がこの固い石畳に投げ出されるか、びくびくしていた。

ただ、この峠を重すぎる荷物を背負って歩く人夫にとっては、この石畳はありがたいようだった。泥に足を取られる心配はない。もう、暗くなりかけているというのに、荷物を背負って反対側から歩いてくる男女の数は少なくなかった。狭い石畳の道を馬に乗ったバードとすれ違うため、道の端の土手に寄りかかる人夫が、かわいそうだった。

「イッチ、イッチチ！」

バードが思わず叫んだ。右足の内ももが、虫にチクつと刺されたのだ。反射的に叩いた手に気絶した小さなアブのような虫がくっついてきた。目は大きな緑色、体は白黒の縞模様だ。よく見ると、バードの足の当たりに仲間が群がってブンブン飛んでいる。普通のアブより小さく、すばしっこかった。痛みがすぐにかゆみ変わった。

「イトー、虫は何？アブじゃないの？」

「いたた！バードさん、僕も刺されました。痛いし、かゆいし、どうしようもないです」

大きなアブは、からだに留まらせておいて、手でつぶせば刺されずに済む。しかし、この小さなアブはとにかくすばしっこくて、なかなかつかまらない。しかも、どんどん集まって来て、怖いぐらいだ。

案内人から話を聞いたイトーが説明した。

「それは、この地方ではメジロと呼ばれる小さなアブだそうです。夏の間、清らかな小さな川に生まれ、^心か月ほど生きています。鋭いアゴで皮膚を切り裂き、にじみ出した血液をペロペロなめるのだそうです。朝明るくなりかけた時、夕方暗くなりかけた時に特によく出てくると言ってます」

「ノイジーね。ブンブンうるさくてたまらない。かゆいし」

バードを載せた子牛は、黒沢峠の頂上についた。誰燃やしたのか、焚火がチヨロチヨロと炎をあげている。その周りに大きな荷物を背負った商人が^心人ほど腰を下していた。土の上に置いた大きな荷物をほどこくでもなく、縄をゆるめただけだった。

メジロがぶんぶん飛び回っても、腕の自由が効かないから、追い払うことができない。一人で60キログラムほどの荷物を背負って峠をのぼって来たから

息使いは荒かった。顔はげっそりとして、目玉は今にも飛び出しそうだった。体は痩せていて、筋肉がプルプル震えている。

メジロに刺されても追い払う気力もなく、刺されるまま。刺された傷口から血が流れ出し、体一面に流れ出していた。大汗をかいているので、血はところどころが洗い流されている。



「神はアダムに向かって言われた。『お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に戻るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に戻る』」

バードは禁断の果実を食べたアダムとイブがエデンの園を追い出された時のことを思い出していた。この貧しい地方でも人々は家族のためにパンを得ようと、「額に汗して」真面目に働いている。

重い荷物を運ぶのは男だけではなかった。女たちも背負子に大きな荷物を積んで、体を二つ折りにしながら峠をのぼったり降りたりしていた。

「まるでアダムとイブの子孫だわ」バードはこの地方の人々の勤勉さに感動を覚えた。

のみしらみ馬のしとするまくらもと

イザベラバードが旅（1878年梅雨時）をする180年前に、東北地方を旅行して、俳句をよんだ松尾芭蕉（1702年）がいる。「奥の細道」という旅行記に書いている。

芭蕉の句は、のみやしらみでかゆくて眠れないのに、枕元には馬が「しと」つまり、おしっこをする音が聞こえてきて、寝れやしない、という意味。

明治初旬のバードの旅先でも、のみやしらみが待っていた。バードはのみに襲われないように、組み立て式簡易ベッドを持って旅をしていたが、それでもしよっちゅう刺されて、かゆみと戦っていた。